

手話通訳士の鈴木隆子(53)に相談したのは、東京海上グループの「イーデザイン損保」。この自動車保険会社には、社員が手話をまなぶ「サイン部」がある。社長の稲寺司(53)は友人の鈴木に、部についての助言をもらおうと考えた。

サイン部の設立は2年まえ。3人いたろう者社員のうち1人が勤めて間もないのに辞めた、そのショックがきっかけだった。

音声を文字化するソフトを備えるなど、働く環境を整えたつもりだった。聴者が入社してきたときには、「ろう者への配慮」を呼びかけてきた。

けれど、仕組み作りにかまけていた。配慮を忘れてしまっていた。ろう者の心に本気で向き合っていないかった。稲寺には、そんな反省があった。

鈴木は、東京・新宿にあ

「孤独に気づいて」涙の告白



イーデザイン損保サイン部のみなさん。両手の人さし指を半回転違いにグルグル回すと、「手話」という手話。前列右が、あの「告白」をした斎藤知見＝東京都新宿区

藤が上司に導入を頼むも、後回しにされていた。

斎藤は、ろう者への理解がないのがつらくて、これまでも会社を変わってきただ。ろう者がいるイーデザインなら大丈夫かな、と期待していた。「ここも同じか」と思い始めていた。

斎藤の告白。鈴木は、稲寺たちに抗議した。「毎朝泣いている社員がいることに、なぜ気がつかないんですか!」

稲寺にとって、斎藤の告白は極めてショックだった。苦しさに気がつかなかった自分を恥じた。決意した、今度こそ!

配慮と情報保障。その二つをめぐる試行錯誤の日々だ。「でも、斎藤の告白に救われました。遠慮せずには本音を言ってもらえる優しい社内文化を築いてみせます。ゴールのない努力を近づけます」と稲寺。サイン部のメンバーは50人を超えた。社員5人にひとり、の

斎藤は文字化ソフトを手配してもらった。朝礼に参加し、ミーティングでも使っている。孤独を感じたときは、トイレにかけこみ、鏡を見る。(サイン部を通じてみんなに理解してもらった。がんばろう)

筆者は、ろう者と手をつなぎたくて手話を学び始めました。手話技能検定3級は取ったものの、取材では使えません。通訳をしてくれた方々、下手な手話を読み取ってくれた方々に支えられました。

ろう者が求めているのは、少しの配慮と、できる限りの情報保障です。それらがないと、働くスタートラインにさえ立てないので。聞こえぬ運命、を想像してみてください。きっと出来ると思います。

あなたの職場にろう者がいたら、食事にも誘い、ろう者の孤独を吹き飛ばして下さい。敬称略、おわり

(編集委員・中島隆)